文化能力教育考察

ー言語・人文・自然科学科目を通してー

Cultural Competencies through Languages, Liberal Arts, and Natural Sciences

星野　裕子
HOSHINO Yuko

Abstract: Cultural Competencies have not been given much importance in college curricula recently. They have been regarded as knowledge that is taught in only specific classes. With many required classes for graduation, universities have had the tendency to put such classes aside. What is interesting, however, is that university students are aware of the importance of such competencies for their future careers and do not feel confident in this area. The author has been trying to incorporate cultural competency training into various types of classes. In this paper, she discusses the contents of and procedures used in such. Also, she presents practical suggestions for those who are interested in teaching similar classes to help students become better able to deal with cultural issues in a global context.

Keywords: Cultural Competency, Curricula, Higher Education, Globalization
文化能力、カリキュラム、高等教育、グローバリゼーション

１．はじめに

自らの文化や他の文化に対する理解や適応力、受容力を促す教育は「～文化」科目の中でしか行えないだろうか。この疑問の背景には、カリキュラムの構成上人文科学科目に時間を割けない技術系や理科系の大学において、これらの科目はしばしば全く開講されないか、開講されても実際には学生が時間的に履修できないようなシステムになっていることがある。興味深いことに、このような技術系の大学の学生自身が自らの“異”文化理解力（もしくは他文化理解力）不足を意識し、自らの将来に必要であるにも関わらずそのよう

な能力が十分に備わっていないのではないか、と危惧していることである。中山他（2005）は、８大学（北海道、東北、東京、東京工業、名古屋、京都、大阪、および九州大学）工学部の学生 2084 名の大学カリキュラムに対する意識を調査した結果を分析している。この中で、学生が重要性を認識しつつも自己の達成度が低い能力としてあげているのは英語と、ここで問題としている異文化適応力で、他の能力に比較して突出している（認識している重要性と自己評価によるその能力の達成度の差がそれぞれ 75.2%、74.2%）ことが分かる。

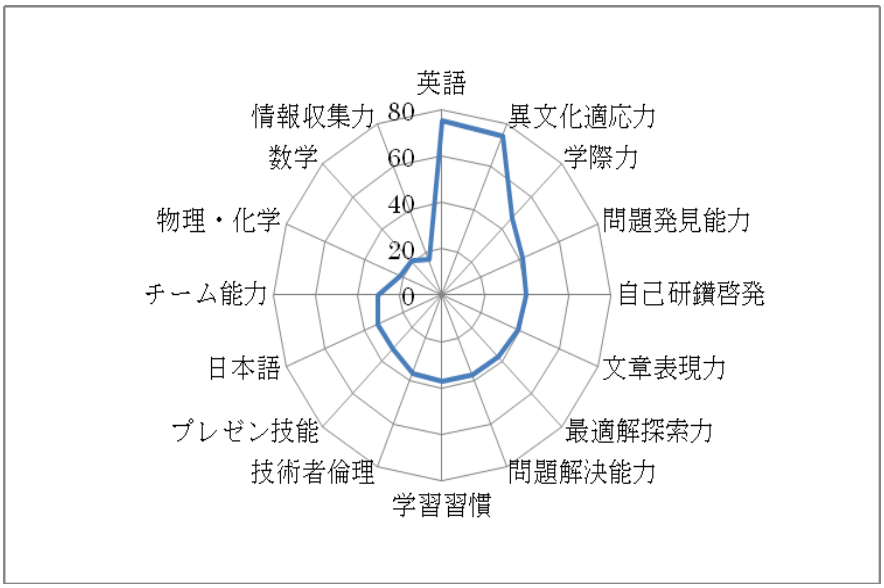

図１　各種能力の重要度と達成度自己評価との差

しかしながら、多くの大学のカリキュラムの中でこのような能力を涵養することを目的とした文化関連科目の数はわずかか全くない場合もある。すでに必修専門科目で時間数が目いっぱいのカリキュラムの中でそのような科目に時間を割けない、という事情もあろう。またそのような科目の重要性を大学と教員がまだ認識していない、ということも要因と考えられる。このような状況のなかで、「～文化」科目以外の外国語科目、人文社会系科目、自然科学系科目においても文化理解力・受容力を養う教育の導入が可能ではないか、という試みについて論じ、同様な試みに対する実際的提案を行いたいと考える。

２．文化能力

Martin と Vaughn（2007）は文化能力（Cultural Competence）を以下のように説明している。

“Cultural competence refers to an ability to interact effectively with people of

different cultures. Cultural competence comprises four components:
(a) Awareness of one's own cultural worldview
(b) Attitude towards cultural differences
(c) Knowledge of different cultural practices and worldviews, and
(d) Cross-cultural skills.
Developing cultural competence results in an ability to understand, communicate with, and effectively interact with people across cultures."

自文化への理解力、文化と文化行動・世界観の違いへの気づき、そして違いを乗り越える様々な技能を獲得することにより、種々の文化的背景を持つ人々と生産的な関係を結ぶことができるとしているわけだが、ではこういった力を大学の様々な科目を通してどう養ってゆけるだろうか。次に各論を述べたい。

３．言語（外国語）科目を通して

外国語科目に文化知識や文化能力教育を導入することには限界を感じる教員も多い。言語とその背景文化（たとえば英語教育においては英語圏文化、中国語教育においては中国語圏文化）のつながりには切りはなせないものがあるが、言語教育科目においては（そしておそらくどんな科目においても）常に時間不足が大きな問題であり、文化について論ずる余裕が見いだせないことが多い。川島（2009）は言語教育（英語）に文化教育を担わせることの無理･矛盾を論じ､言語科目の中では言語習得に集中することを提言しているが、現実問題として、カリキュラムで言語科目と文化科目の両方を開講し、学生に履修させることが不可能な場合がしばしばである。そういった場合には、言語科目はたとえ深い理解を獲得させることは不可能だとしても、文化教育の役割をわずかなりとも担わざるを得ないのではないか。

筆者が開発した工学部での中国語カリキュラムにおいては、一年 3 期制で中国語 I、II、III と履修するのであるが、I、II において発音、基礎的語彙、文構造などを中国文化を“埋め込んだ”聴解や読解教材を通して学習し、III においてその知識を基礎に、履修学生自身が選択したテーマで中国語の情報を検索、読み込み、必要単語を自分で習得し、スクリプトやパワーポイントを作成、最後に中国語でプレゼンテーションを行う。（図２）始めの 6 か月に使用する教材を“文化埋め込み型”にすることがポイントであり、具体的に例を挙げれば、聴解にレストランのメニューを使い、中国料理の基礎知識と食物にかける中国の人々の情熱について触れる、また読解資料に中国の民話や漢字の歴史などを扱ったものを取り入れる、などである。興味深いのは、履修学生はこういった、既に授業で学習したものを土台として自身のプレゼンテーションのテーマを選択することが非常に多い、という

ことである。逆の視点で見れば、学生は手本がないときテーマ選択に迷うことが多々ある、ということでもある。そういった意味でも埋め込み教材は学生の知的好奇心を刺激し、問題発見やその探索・解決力を養い、学びを促すのに有効であると言えよう。以下に導入資料の一部と学生の選択テーマ例を挙げる。両者の間のつながりと、学生の興味の発展が見て取れる。（表１）

図２　履修者のプレゼンテーション

表１　科目における導入資料と履修者の選択テーマとの関連

導入資料	選択テーマ
メニュー（発音・聴解）	中国料理
中国人と茶（読解）	中国茶、工夫茶（中国茶道）
七夕（読解）	七夕（紙芝居）・桃太郎・かぐや姫（日本民話紹介）
漢字の起源（読解）	漢字の歴史・中国の歴史、三国志
春節（読解）	中国の正月 中国の誕生日の過ごし方
四大発明について（読解）	中国の古代科学技術 中国医学・漢方薬

プレゼンテーションそのものが日本人学生には大きなストレスであり、まして外国語で行うのは大変にハードルが高い。このことを教員は自覚し、学生には多くの支援を与えることが重要である。教員自身もプレゼンテーションに参加して学生と同じプロセスを通る

ことをモデル・模範として見せたり（図３）、また他の科目の担当教員に最終発表会を聴講してもらう(図４)、なども学生にとって大きな励みとなる。プレゼンテーションを成し遂げること自体が恥の日本文化（自文化）を意識し、文化的障壁を乗り越える体験でもある。

図３　担当教員によるプレゼンテーション

図４　他科目担当教員によるプレゼンテーション発表会の聴講

４．人文社会科目を通して

社会学、経済学を扱う科目の一例として環太平洋諸国（アジア、オセアニア、南北アメリカ等）について論ずる科目を挙げたい。この科目のなかで、文化の多様な捉え方を多くのシンボルや習俗などを例に挙げて履修学生に提示したが、これにより学生は表層だけでない隠れた深層の文化現象にも徐々に目を向けるようになる。最新の資料をできるだけ取

り入れるために映像・音メディアなども多用し、ディスカッションや演習を挟み込んで、単なる座学に陥らないよう工夫をこらした。履修学生は一人一人自分の興味のある国もしくは文化圏について調査を行い、最終プレゼンテーションを課される。ここでその学生なりの文化の捉え方、理解力が表現される。以下に科目スケジュール概要を記す。（表２）

表２　科目スケジュール（概要）

週 2 回各 60 分 x 9 週間	
1－2 週	総論（文化とは、捉え方、表象）
3－5 週	各論（中国文化圏、韓国、インド、北中央南米、オセアニア等）・ディスカッション・演習
6 週	調査・プレゼンテーション準備
7－8 週	個人プレゼンテーション
9 週	総括

プレゼンテーション発表会終了後、履修学生同士の評価が集められ、個々の発表者にフィードバックされる。この科目ではおよそあらゆる資料が文化を語る材料となる可能性を持つ。小さな箸置きのデザイン一つが自文化の価値観、例えば日本文化の清潔さ、所作の美しさへの志向を発見し、他文化との価値観の違い、例えば中国文化の食事における融通無碍さ、味覚への飽なき追及を洞察するきっかけとなり得る。重要なことは教員が柔軟に思考し、資料を活用して履修学生の知的興味を刺激し、解答を与えるのではなく、自ら観察し､考える姿勢を涵養することにある｡ただし学生はすぐにそれができるわけではない。最終プレゼンテーション前までに多くの演習が必要となる所以である。

５．自然科学科目を通して

工学科目の一つである「Compressible Fluid Flow」は流体力学を扱う科目であり、純粋に自然科学の科目であるが、外国人担当教員の講義スタイル、クラスの進め方、課題の出し方を通して履修学生に他文化の価値観の違いを学ばせることが可能である。この科目は英語のみで行われ、履修学生の理解に問題が生じたときに日本人専門教員・英語教員のチームがサポートをする、という体制で行われた。担当外国人のカジュアルでフレンドリーかつジョークに満ちた講義、ディスカッションを多く取り入れ、質問も歓迎される雰囲気に履修学生は日本人教員の講義のアプローチとの違いに気づかされ､また講義に学生も｢参加する・貢献する」ということにも驚かされる。提出された課題は講義のなかでしばしば語られ、（提出者の名前は明かされないが）共有される。このような経験から履修学生は学びにおける価値観と期待の違いにほぼ初めて触れることができる。これは戸惑いも誘発する可能性が高いので、サポート教員による学生とのディスカッションなどにより、文化の

違いへの気づきを促すことが大切である。

もう一つの科目である「Scientific Paper Writing and Presentations」では英語での論理の組み立て方、論文構成の違いを繰り返し演習し、また口頭発表ではスタイルの違いを学ぶこととなる。日本人学生は多くの場合、論文概要 abstract に結論を含めず、最後の conclusion まで全く論述しないことがしばしばある。これは英語の論文構成と大きく相違する点で、日本語の文章の典型的構成である「起承転結」との関連が指摘されるであろう。この点なども考え方・思考の組み立ての文化間の相違を論ずるよい材料となろうし、また将来英語論文執筆を目標とする学生にとっては必須の演習ともなる。

プレゼンテーションでは、日本文化ではしばしば無視されるアイコンタクトの重要性やリラックスした態度、ハンドジェスチャーの威力などが討議される。そして英語圏と日本で最もスタイルの違いが際立つのが、聴衆の反応への即応性であろう。聴衆がどうあろうときっちり原稿通り読み上げるのではなく、その時々の反応や質問に対応しつつプレゼンテーションを行ってゆくというスタイルである。これはほぼカルチャーショックに似た価値観の転換が必要である。履修学生が納得し、実行できるようになるためには多くの演習が必要であることを指摘しておきたい。

６．結び

大学において、学生が必要とする能力を養成するための科目を必要なだけ開講し、必要なだけ履修させることが理想である。しかし現実においては、時間、教員、施設等、多くの制約がある。そのなかで少しでも必要とされるものを、現実的に開講するためにはどうしたらよいか。この小論が教育に携わる人々にとって、ささやかなヒントとなってくれることを願う。大学生が自分に必要ではないか、と自覚し、かつ自身では十分に習得していない、と考えている異文化適応力・文化能力を、現実・現行のカリキュラムのなかで習得させる方法の一つとして参考に供したい。

７．提案

最後に同様な試みのための提案を挙げたい。

１．様々な科目で文化を扱うことは可能である

柔軟に、どのような科目にも可能性があることを前提に科目開発を考えることが重要である。

２．あらゆるものが文化を論ずる材料に成り得る

例えば、文化間における学術論文の構成の違い、講義のスタイルの違い、日用品のデザイン、しぐさの違い等が挙げられよう。

３．履修者に選択の余地を与える
個人には他文化を受容する権利も拒否する権利もある。履修者が他文化を受容することを強制しないことが個人の権利を尊重することであろう。
４．教員自身に他文化に対する予断・偏見・ステレオタイプがないか、その程度はどの程度か、履修者にそれを移植していないか常に検証する

参考文献

Mercedes Martin & Billy Vaughn (2007). "Strategic Diversity & Inclusion Management" pp. 31-36. DTUI Publications Division: San Francisco, CA.
川島秀代「的を射ない英語教育　言語教育か？文化教育か？」日本大学大学院総合社会情報研究科提出レポート 2009
中山実　他「工学系学部学生の「人間力」に関する調査」『工学教育』53, 4(2005)：46－51.